

田辺元の哲学への序章

和田 平司 大庭 温人 大庭 裕子 大庭 ゆづき 高橋 千明  
 林 郁枝 原田 尚子 加々見 真由美 浜田 順子

On the Introduction for Philosophy of H.Tanabe

Heiji Wada Haruto Ooba Yuko Ooba Yuzuki Ooba Chiaki Takahashi  
 Ikue Hayashi Shoko Harada Mayumi Kagami Junko Hamada

(所属なし)

あらまし 田辺元は個人意識と超越的存在を媒介するものとして 「世界」という概念を手に入れた。そこで田辺哲学の「世界」は時間と客観における自我を内包し外延として具体的には体という概念を作図し田辺元の哲学の序章としたので報告する。

キーワード 内包と外延 絶対的弁証法 集合論

1.はじめに

田辺は個人意識と超越的存在を媒介するものとして世界という概念を手に入れた。

個人意識というのは、時間が形式的には未来から形成され、実質的には過去から発生するもので、身体を媒体として、他の多くの自我と結合し統一するものとして扱います。

自我とは自我が身体に限定されることによって「個人的」となる。

超越とは「自我の意識活動の可能範囲としての地平圏ではなくして、この地平圏を自我に対して負荷するところの存在にして初めて超越的对象といわれるのである。」という。

そこで、田辺元の「世界」という概念の作図をした。

「世界」は時間と個人的における自我を内包し、外延として具体的には身体という概念を作図し、

田辺の哲学の序章としたので報告する。

2.本論

田辺のいう「世界」を集合論的に記述することを試みる。

個人意識と超越的存在との時間と自我を作図するに当たり、まず内包的記法では条件  $P(xyt)$  を満たす  $xyt \in U$  の全体からなる集合  $A$  を図で表すと

$$A = \{ (xyt), (y^2+x^2=r^2) \mid x,y \in U \mid P(x,y,t) \subset U \} \dots \textcircled{1}$$

① 式で与えられる。

そこで  $A$  の内包から発生する外延を

$$B = \{ x, (r-x) \mid x \in R \} \dots \textcircled{2}$$

で与えられる。

図1にその作図を示す。

田辺のいう「世界」は時間と客観における自我を内包し、外延として具体的には身体をいう。

参考までに内包と外延とは前者はある記号（言葉）が意味する対象に共通な性質のことであり後者は記号が指す具体的対象のことを指す。

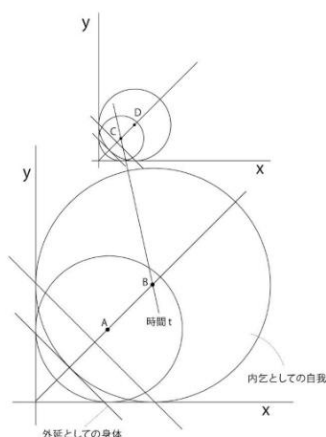


図1：内包と外延（「世界」に診ける「時間と〇〇」）

### 3. 考察

まず、田辺のいう自我とは何か？ 身体とは何か？

田辺は自我に対する「個人的人格たる汝」と自我との両者を相互に媒介する「人格の共同体」という概念を提示する。

そして身体は「我を我として存在せしめる限定の根拠」であると同時に「我がその限定を超えて無限の絶対的全体に帰入する媒介」であるという。

田辺は自我とは身体に限定されることによって「個人的」となる。

このことにより作図が可能であるといえる。

### 4. 結論

田辺元の哲学の序章として「世界」という概念を作図することを試みた。というのも田辺は個人意識と超越的存在を媒介するものとして世界という概念を手に入れた。

図1に示すように集合論的に自我とは身体に限定されることによって、「個人的」となるから内包として自我を個人的量  $r$  の大きさを表し、外延として具体的に身体を限定することにより作図が可能となる。そして、時間とは未来から形成され実質的には過去から発生するもので、身体を媒体として他の多くの自我と結合し統一するものとして扱われる。このことにより図1に時間  $t$  を作図し得た。残された課題として世界を  $n$  次元にまで展開することであり、そして作図できることである。

### 参考文献

- (1) 渡辺 和晴 “田辺元における弁証法の展開 (II) —大正から昭和への思想史—” 愛知教育大学研究報告.29 (人文科学編) P97~112 (1980)
- (2) 藤田 正勝 “田辺と西田の哲学とシェアリング”、講演録 (第7回年次大会) 京都大学 (2010)
- (3) 駒木根 聡 “田辺と西田の哲学” 東洋大学大学院紀要参加集 (2012)
- (4) 森村 修 “種の論理”におけるメタフィジックストゥールズ哲学から見た田辺の実践哲学— 法政大学研究論文 (2012)
- (5) 合田 正人 “種の論理” 論争をめぐる— 高橋里美 務台理作再考— 日本哲学史研究、第17号 (2018)